

すべての学習活動に生きる言語技術教育

— 本校の言語技術科が育む「言語力」 —

渡 部 久美子 (聖ウルスラ学院英智小・中学校)

はじめに

平成 23 年度に小学校、24 年度には中学校で新学習指導要領が全面実施となり、変化の著しい知識基盤社会に生きる子どもたちの「生きる力」を確かに育むための研究が必須となっている。特に新学習指導要領「総則」には「各教科の指導に当たっては、児童（生徒）の思考力、判断力、表現力等をはぐくむ観点から、基礎的・基本的な知識及び技能の活用を図る学習活動を重視するとともに、言語に対する関心や理解を深め、言語に関する能力の育成を図る上で必要な言語環境を整え、児童（生徒）の言語活動を充実すること。」と謳われている。これを受けて、「言語活動の充実」のために各学校では試行錯誤しながらの実践が行われているものと思われる。

他校の「言語活動」についての現状を調査して見えてきたことをふまえ、これまで本校で取り組んできた言語技術教育とその成果について報告することとする。

アンケート結果から見えてきたこと

新学習指導要領でいうところの「言語活動の充実」を実現するために、他校ではどのような対策を講じ、実践しているのだろうか。それを探るべく、平成 25 年 9 月に言語活動に関するアンケート（対象：仙台市内 197 校、東広島市内 51 校、東京都言語能力向上推進校 49 校）を実施したところ、次のような現状が明らかとなった。

憂慮すべきは、多くの学校が児童・生徒の「言語力」不足を認識しながら、十分な教員研修を行えず、共通理解の上に立った指導ができていないということである。図 1 を見ると児童・生徒の「言語力」が「十分高い」「ある程度高い」とする学校が半数に至っていない。また、図 2 からは「言語活動」についての校内での教員研修を「年に 1、2 回行っている」あるいは「全く行っていない」学校の割合が、小学校では 60%、中学校では 79.8% もあり、その改善策を十分に練ることができていない現状がうかがえる。さらに、図 3 では各教科、特別活動における「言語活動」を通して育成すべき力を明確にしていない学校が 20% を超えており、新学習指導要領で目指すところの言語力の育成に関し、到達目標が設定されないまま進行している学校があるという問題が浮き彫りとなった。

問 1 貴校の児童・生徒の「言語力」についてどのように理解していますか。

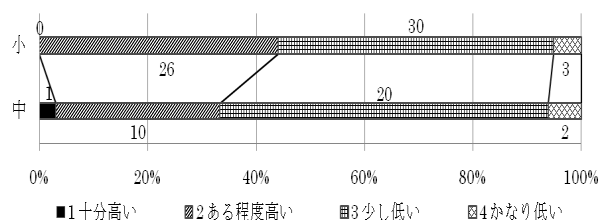


図 1

問 2 「言語活動」について、校内での教員研修を行っていますか。

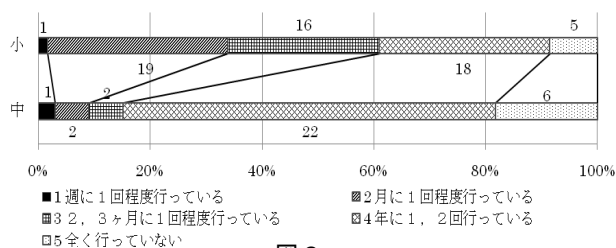


図 2

問3 各教科、特別活動において、「言語活動」を通してどのような能力を育成するかを明確にしていますか。

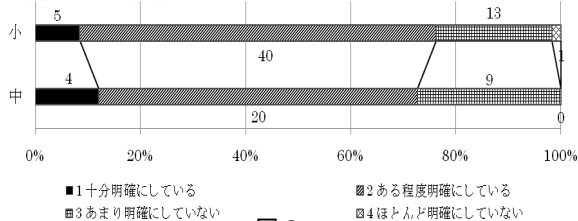


図3

問4 「言語活動」を取り入れるようになって、児童・生徒の「言語力」は総合的に高まってきていると思いますか。



図4

しかし、図4でわかるとおり「言語活動」を取り入れてから児童・生徒の「言語力」が総合的に高まってきているとする学校は多く、この結果からも新学習指導要領で打ち出されている「言語活動」の実践は児童生徒の「言語力」を向上させるものであることは確かである。ただし、その実践内容は個々の学校にゆだねられる部分が多く、一貫した指導のもと系統的に研究が進められている学校とそうでない学校とでは、今後、児童・生徒の「言語力」に大きな差が生じてしまう恐れがあることは否めないだろう。

本校の言語技術教育

(1) 言語技術科

児童・生徒の確かな言語力の獲得と豊かな人間性の育成を目指し、本校で言語技術教育すなわちランゲージ・アーツ＝世界標準の母語教育を取り入れてから7年が経過した。もちろん、新学習指導要領で「言語活動の充実」が強調される以前からの取り組みであり、一つの教科として「言語技術科」を設け、独自のカリキュラムに沿って、現在1年生から9年生（中学3年生）まで週1時間扱いで授業を行っている。カリキュラムはつくば言語技術教育研究所所長の三森ゆりか先生による「言語技術」の体系的なプログラムに基づいて作成されており、基礎となる「問答ゲーム」を土台とし、「対話」「説明」「分析」「論証」「物語」の5つのカテゴリーの内容を、学年が上がるにつれてより高度なものを扱うように組み立てられている。一貫した指導により形成的評価を行いながら、振り返りと繰り返しの学習を大切にしたマスタリーラーニング（完全習得学習）を目指し、発展的にスパイラル方式で学びを深めているところである。カリキュラムの実践により、児童・生徒は絵や物語、説明・報告文など様々な情報に向き合い、分析的、論理的、批判的に検討し解決する手法、表現の仕方といった技術を身に付けていく。そして、最終的には、プレゼンテーション、ディベート、テキスト分析、小論文や論文を書くといった高度な活動を生徒自身の力で出来るようになっていくのである。

これらのプログラムを通して本校で特に力を入れてきたのは、「読む・書く」能力の向上である。「話す・聞く」領域のように音声言語を用いた活動としては、授業中の話し合い活動を重視し、自分の考えを論理的にわかりやすく相手に伝える、また、他の人の発言を自分の考えと比較しながら的確に聞き取る訓練を行ってきた。こういったコミュニケーション能力は、人として社会生活を送る上で必要な力である。これに対し「読む・書く」領域のように文字言語を用いた言語活動は、言語以外、例えば話し手、聞き手の表情や態度などの要素が外され、言語のみの情報による活動になる。本校では、視覚化された言葉を深く読み解き、自分の考えを整理してまとめ、視覚化された表現に集約していく活動を重視している。2003年のPISA調査で自由記述問題の無解答が多いことが話題に上ったが、以前から日本の子どもたちが弱いとされていた「書く」力の育成が言語技術科では体系的、継続的に行うことができる。本校でも、数年前までは書くことに苦手意識を持つ児童・生徒が非常に多かったが、書くための手法を学び、言語技術の授業のたびに繰り返し書き、添削・評価されることによ

って、変化が見られるようになった。書くことに抵抗がなくなり、熟考した結果を論理的な文章で表現することができるようになってきたのである。

こうして身についた「言語力」は、人が人として持つ言葉をさらに豊かにし、自己を表現することに自信を持たせる。本校の言語技術教育は、技術の習得に留まることなく、子どもたちの真に「生きる力」を強化するものであり、豊かな人間性を育成する教育でもあるといえる。

(2) 言語技術科での学びを生かした他教科での実践

本校では、1年生から6年生までの担任は自分のクラスの言語技術科の授業を担当している。5年生以上は教科担当制となっているが、確かな言葉、豊かな人間性を育む言語技術教育はすべての学習の基盤となるものであるとの共通理解のもと、担任、教科担当者はすべての学習、学校生活全般において日常的に言語技術を生かした指導を意識して行っている。また、7年生以上の指導に関わる教員も、言語技術の校内研究、あるいは、つくば言語技術教育研究所での研修を受けながら、小・中一貫で児童・生徒の「言語力」を高めるべく指導に当たっている。

今年度は、言語技術の研究として年13回の校内研究が予定された。うち9回は三森ゆりか先生を講師として招き、2日間ずつ言語技術科及び、言語技術を生かした他教科の授業研究が行われてきた。また、11月には研究主題を「言語技術がもたらす論理的思考力と表現力の育成——言語技術を習得し、創造的思考力と課題解決能力を育成する——」とする英智公開研究会が行われている。それぞれの教科において、到達目標としての願いとねらいを設定し授業を行うが、以下にその一部を紹介する。

英智公開研究会 授業の中から抜粋

教科	学年	到達目標 願い
言語	7年	テキストから根拠を探し、物語を読み深めることで論理的な思考力を身につけさせたい。
国語	6年	物語を分析し、読み深めることで、より豊かに物語を味わわせたい。また、一つの物語をきっかけにして、関連するテーマの物語を進んで読み広げようとする態度を育てたい。
社会	3年	自分たちの住む地域の文化に興味を持ち、郷土の伝統文化に対する愛着を持たせたい。適切に資料を用いて学習内容をまとめる力をつけさせたい。他者の意見を尊重し、自分の意見と照らし合わせながら議論できる力を育みたい。
数学	7年	日常生活にあふれている数字を文字で考えることにより、複雑なしくみを一般化・単純化して考える姿勢を身につけさせたい。文字式をコミュニケーションの一つの手段として使い、様々な事象の関係を読み取ろうとする姿勢を身につけさせたい。
理科	5年	電磁石について定量的に実証する活動を通して、科学的な見方や考え方を身につけ、エネルギーの概念を持たせたい。
英語	8年	論理的思考に基づくコミュニケーション能力の素地を身につけてほしい。 (パラグラフライティング)

いずれの授業も言語技術科で育まれる「言語力」を基にして議論を中心に進められ、最終的に思考の結果を作文等の視覚化された文字言語でまとめ上げる形態をとっている。当然のことながら、普段の授業においても基本的に同じような方法で学習が進められている。また、ここに示されていない音楽、体育、図工・美術などのような実技を伴う教科でも、論理的な思考力、表現力育成のための学習

過程が工夫されている。このように小・中一貫した学習方法により、児童・生徒は確かな方向性をもって、スパイラルに学習を深めていくことができるのである。

言語技術教育の成果

言語技術科をはじめ、他教科、その他の学習活動において一貫した言語技術教育を継続することで、児童・生徒の「言語力」は少しずつであるが確実に高まってきている。毎年1月に実施される標準学力調査では、どの学年も全教科にわたりほぼ全国平均を上回る結果を記録しているが、特に国語では作文の領域の正答率が100%という学年も多い。言語技術科を特設する以前の平成18年度、そして言語技術を6年間学んできた平成24年度、25年度の6年生の文章による記述式問題を抽出して正答率をグラフ化したところ、その成果がはっきりと現れた。平成24年度の理科を除き、どの教科も平成18年度に比べ、自分の考え、事象の理由、式の意味などを文字言語で説明する記述力が全国平均を上回っていることがわかる。(図5～図7)

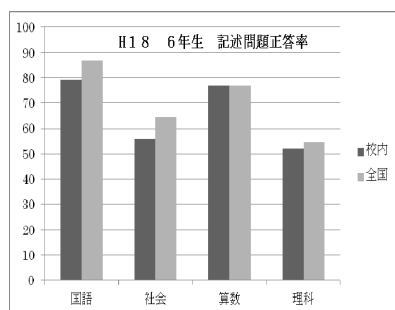


図5

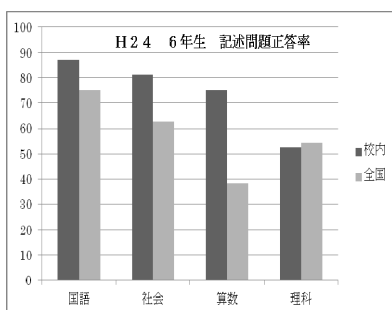


図6

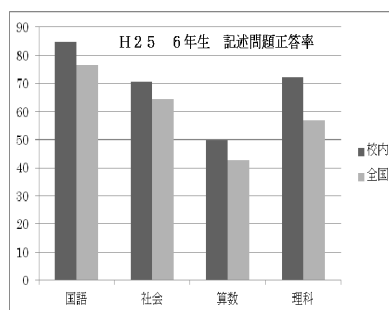


図7

もちろん、記述問題のみの抽出で全体的に「言語力」が高まったということとはできない。「話す・聞く」能力に至ってはペーパーテストで計りきれない面もあるだろう。しかしながら、これらのグラフは6年間の言語技術教育が本校の児童の論理的思考力と表現力を高め、「読む・書く」能力を確かに向上させたことを示している。言語技術教育は論理的思考と表現を必要とするすべての学習活動に確実に生かされるといえるのである。

おわりに

昨今の情報が氾濫する社会で力強く生き抜くためには、基礎的な知識・技能を習得と、それらを活用する論理的な思考力・判断力・表現力の獲得が必要不可欠であることは周知の事実である。これまで述べてきた言語技術教育で身につく力はすべての学習活動、さらに言えば人間として生きるために基盤となるものである。子どもたちには生涯にわたって、確かに豊かな言葉の使い手となり、豊かな人生を送ってほしいと願う。子どもたちの幸せな未来のために、教職員は子どもたちを取り巻く言語環境を整え、共通理解のもと一貫した言語技術教育をさらに充実させていかなければならない。

- 参考文献 梶田叡一責任編集 (2013) 教育フォーラム 51 いま求められる言語活動 (金子書房)
 梶田叡一・甲斐陸朗 (2009) 新学習指導要領対応 言語力を育てる授業づくり (図書文化)
 三森ゆりか (2002) 論理的に考える力を引き出す
 一親子のできるコミュニケーション・スキルのトレーニング (一声社)
 平成25年度 英智公開研究会実施要項 国語・言語技術合同部会報告書